

外国人生徒等のキャリア支援について

飯田市公民館副館長補佐兼学習支援係長 近藤 善彦

飯田市公民館は、戦後 50 年の節目となる 1995（平成 7）年に飯田市が開催した「平和フォーラム 飯田発地球市民への道」をきっかけとして、1996（平成 8）年に「異文化交流セミナー」を開講し、翌 1997（平成 9）年からは、中国帰国者のための居場所と日本語学習の拠点として、「異文化交流セミナー」を深化させる形で、公民館事業初の日本語教室「わいわいサロン」を開始し現在に至っている。

2018（平成 30）年に文部科学省が行った「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」によると、日本語指導が必要な高校生等の中途退学率は 9.6% で、全高校生等と比較して 7.4 倍と高く、これは当地域にも同様の傾向が見られた。

国籍に関係なく市内に居住する者は同じ市民であり、外国人高校生等も日本人高校生等と同様、地域の将来の担い手である。言葉や文化の壁を乗り越えて、外国人高校生等も夢や希望を持ち、夢に向かって学び、自己の目標を実現するとともに、地域社会の一翼を担っていく。そのような真の多文化共生社会の実現に向けて、飯田市公民館では 2020（令和 2）年度から高校生等に対するキャリア支援を開始したところである。

はじめに

日本の中央、長野県の最南端に位置する飯田市は、東西に南アルプスと中央アルプスに抱かれ、南北に天竜川が貫く、豊かな自然と雄大な景観に囲まれた、四季折々の変化が美しいまちである。

古くは東山道、三州街道などの陸運や天竜川の水運に恵まれ、東西・南北交通の要衝として繁栄するとともに、人々の進取性と学究性に富んだ気質は、経済的・文化的に独自の

発展をもたらしてきた。

「飯田」の地名は「結いの田」が語源とも言われているが、互いに助け合う「結い」の精神や、「ムトス（自ら行動しようとする自発的な意志や意欲を表す言葉）」の精神が連綿と引き継がれ、住民主体のまちづくりや公民館活動は全国から注目を集めている。

2027（令和 9）年予定のリニア中央新幹線の開業と長野県駅の飯田市内への設置により、飯田市は日本の各都市や世界と短時間で

結ばれることになる。さらなるグローバル化を見据えた世界に通じる地方都市となるべく「小さな世界都市」の実現をめざしている。

1 飯田市の外国人住民の現状

2020（令和2）年3月時点の飯田市の人口は100,008人。そのうち外国人は2,294人で、人口に対する構成比は2.3%となっている。16歳未満の外国人は319人、外国人住民人口に対する構成比は13.9%であり、また、65歳以上の外国人は107人、外国人住民人口に対する構成比は4.7%となっている。65歳以上の高齢者のほとんどは中国残留孤児1世又は2世であるが、今後、ブラジルやフィリピンにルーツを持つ外国人住民の定住年数も長くなることが想定され、外国人住民の高齢化が徐々に進展していくものと考えられる。

外国人住民は、バブル崩壊後とリーマンショック後に減少したものの、その後は増減を繰り返しながらも微増している。近年はベトナムからを中心とした技能実習生が急増しており、多国籍化が進んでいる。

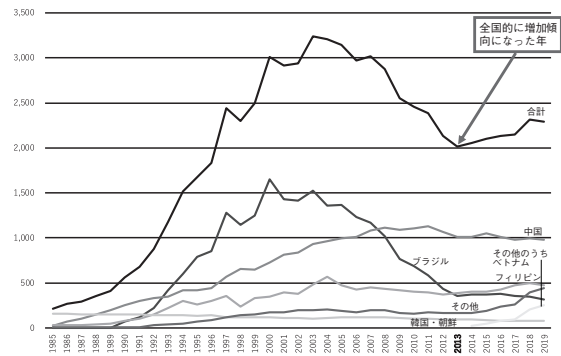
2 飯田市の多文化共生施策

飯田市においては、市民協働環境部男女共同参画課が市内多岐に渡る多文化共生政策の総合調整を担っている。

現在、「多様な価値観を認め合うことを通じた、外国人住民との多文化共生の意識の向上」を重点戦略に掲げ、「多様性を生かし共につくる小さな世界都市」実現に向けた「飯田市多文化共生社会推進計画第2次改定版」を今年度中に策定することとしている。

多文化共生に関する施策としては、関係各

表1 飯田市における外国人人口の推移



出典：飯田市男女共同参画課

課における各種文書や生活関連情報等の多言語対応をはじめ、窓口への多言語相談員の配置、医療通訳者の配置、日本語教室の設置運営、外国人児童・生徒共生支援員の配置、飯田国際交流推進協会等と連携した進学ガイダンスや国際交流事業等々、様々な施策を展開してきている。

3 公民館での多文化共生事業

(1) 飯田市の公民館の特徴

1937（昭和12）年の市制施行以来、6回の合併を経て15の町村が一つになった飯田市では、合併後も旧町村単位に市役所の出先機関（自治振興センター）と共に公民館を配置し、「学習と交流の場」として地域に根差す活動に取り組んできた。公民館の数は、市内20地区それぞれに1館と、連絡調整を担う1館の21館で構成されている。

飯田市の公民館は、「地域中心」、「並列配置」、「住民参画」、「機関自立」の4つの運営原則に基づき運営されている。中でも「住民参画の原則」が最大の特徴で、地域住民から選出された「文化」、「体育」、「広報」などの専門委員が中心となって公民館事業を企画・運営し、その取組を同じく地域住民から選

出され、教育委員会より任命される館長と、市職員である公民館主事が支える体制は“公設民営”とも称されている。

(2) 公民館活動における多文化共生事業

1995（平成7）年、飯田市は「平和フォーラム 飯田発地球市民への道」を開催した。戦後50年を出発点に平和を考えるという視点から、中国帰国者をはじめ外国人住民や異なる文化の中で暮らしてきた人たちとの共生をテーマに掲げた。

長野県は満蒙開拓移民を全国で最も多く送出している。その中でも飯田市を中心とする南信州（飯田市と下伊那郡）圏域は、長野県の送出者の4分の1以上を占めたという歴史をもち、残留孤児婦人の帰国や、その呼び寄せ家族という立場で多くの人たちが暮らしており、このことが地域に様々な課題を投げかけていた。

フォーラムの開催により、平和学習や中国帰国者の生活問題について意識が高まる中、飯田市公民館では1996（平成8）年に「異文化交流セミナー」を開催し、外国人住民を講師に料理や音楽を通じて彼らの文化を学んだ。更に1997（平成9）年には、中国帰国者のための居場所と日本語学習の拠点を目指し、「異文化交流セミナー」を深化させる形で、公民館事業初の日本語教室「わいわいサロン」が始まった。

2010（平成22）年には、「平日の昼間は仕事で参加できない」という学習者の声から、夜間日本語教室「わいわいサロンⅡ」を開講した。以来、夜間日本語教室も現在まで続いており、仕事が終わってから日本語を勉強す

写真1 学習成果発表会の様子



出典：飯田市公民館

る多様な国籍の学習者が集っている。近年は日本語の学習にとどまらず、ごみ分別や119番通報の仕方、病院へのかかり方など生活習慣に関する学びや、盆踊り、和太鼓演奏、七夕飾りなどといった地域文化にも触れている。また、外国人ならではの視点でデジタルストーリーテリングによるフォトムービーを制作し、発表の機会を通じて地域住民との交流を行っている。

20年以上継続する日本語教室。最近では学ぶ側であった外国人が教室の企画運営に携わるようになるなど、外国人リーダーが育てられてきている。

4 外国人の若者が活躍する多文化共生社会をめざして

(1) 中学生・高校生に対する多文化共生事業

高校への進学を考える外国人児童・生徒等とその保護者を対象にした「進学ガイダンス」を男女共同参画課や学校教育課のほか、長野県国際化協会や長野県教育委員会の協力を得て実施している。このガイダンスでは通常行われる説明の他に、高校に通う外国人先輩が受験などの実体験や将来の夢を語る時間

を設けており、外国人児童・生徒等にとっては、より身近に自分事として捉えることができる貴重な機会となっている。

また、飯田市公民館が主管となって取り組む「高校生講座（カンボジア・スタディツアー）」は、地域学習や海外研修を通じて、地域への愛着や誇りを醸成するとともに、世界的視野に立って地域の将来ビジョンを描ける人材の育成を目的として実施してきている。

この他にも、市内に所在する県立高校では、国際教養課程で学ぶ高校生が、“飯田の多文化共生”を課題研究として国際交流団体関係者らとの意見交換を行うなど、様々な場面で多文化への理解、外国人との交流を目的とした事業が展開されている。

(2) 外国人高校生等の中途退学や進学等の状況

2018（平成30）年に文部科学省が行った「日本語指導が必要な児童生徒の受入れ状況等に関する調査」によると、日本語指導が必要な高校生等の中途退学率は9.6%（全高校生等と比較して7.4倍）、進学率は42.2%（全高校生等の6割程度）、就職者における非正規就職率は40%（全高校生等と比較して9.3倍）、進学も就職もしていない者は18.2%（全高校生等と比較して2.7倍）という結果で、中途退学率の高さや大学等への進学率の低さ、就職者における非正規就職率の高さなどが明らかとなった。

このような傾向は以前から指摘されていたが、当圏域の状況を示すデータが見当たらなかったため、実態把握として圏域内の9つ

の高校に協力を依頼し調査を行ったところ、傾向として、進学率は全国と比較して高いものの、中途退学率も高いことが分かった。

(3) 外国人生徒等に対するキャリア支援事業 ア 地域に根ざした社会教育活動を展開する 公民館からのアプローチ

高校への進学や卒業後の進路、中途退学等について、中学・高校で外国人生徒と接している母語指導者や多文化共生コーディネーター、日本語ボランティア教室のスタッフ、日系人社会のリーダーに尋ねてみたところ、小学校高学年から中学の年齢で来日した子供に、中学校生活途中で帰国するケースや高校進学を断念するケースがあるなどの課題が指摘された。更に、高校では国籍や家庭環境を十分に把握していないことや義務教育のような手厚いサポートがなく、学習の遅延や経済的困窮が即中途退学や休学につながってしまうようである。

夢や希望を持つ若者が、言葉や文化の壁などによって諦めてしまうことがないように、また、SDGsに掲げる“誰も置き去りにしない”社会を実現していくために、地域社会も主体的に関わる必要があると考えるところである。地域課題や生活課題の解決の場、人材育成の場である公民館が関わることは当然のこととして、日本語教室で培ったノウハウやネットワークを活用してキャリア支援事業を始めることとした。

イ 初年度の取組

外国人生徒等へのキャリア支援事業は、本年2020（令和2）年度が事業初年度である。本年度は、①自分たちのルーツについて理解

し、誇りを持つこと、②言葉や文化などの壁を乗り越えて、自分の可能性を広げること、③ロールモデルとなる先輩を知り、「自分にもできる」と夢を持つこと、の3点を目的とした講座を組み立てた。

第1回は市内在住の日系ブラジル人3世の方、第2回は中国帰国者2世の方を講師にお招きし、飯田市との歴史的つながりや、来日後の戸惑い・悩みとその克服、進路選択等についてお話を聴いた。参加者からは、「初めて自身のルーツを知った」であるとか、「二つの国を持つことに強みを感じた」、「悩みを持つことは当たり前であり、勇気をもって自分から関わりを持ちたい」といった感想や想いが語られた。これまでにルーツを同じくする先達から実体験を聞く機会がなかったため、貴重な経験となり、話す言葉はそれぞれの心に落ちていった。

第3回は、日系ブラジル人の方からの、中学生・高校生向け応援メッセージの撮影を企画した。応援メッセージは、上述の「進学ガイドダンス」に活用するものであり、就職した20代の成人と学業に励む高校生から、来日した当初のことや、将来の夢や希望につながる応援メッセージを話してもらい、それを

DVDに収録した。この講座の目的は、DVD制作よりも、先輩方へのインタビューを通じて自身の生き方を考えることであるが、コロナ禍の影響により児童・生徒が参加できず残念であった。

最終となった第4回は職場訪問を行った。案内は工場長を務める日系ブラジル人の方であるが、「家族に感謝すること」、「家族のために頑張ること」、「ベストを尽くせば強い人間になり人生が大きく変わること」など、説得力のある言葉が参加者の心に響いた。また、経営する日本人社長は、「国籍に関係なく人として信頼ができ頑張ってくれれば、外国人日本人の分け隔てなく重要なポストについてもらっている」と語り、深い感銘を受けていた。

文部科学省の調査結果を発端に、飯田市公民館が関係機関・団体と共に初めて事業化したわけであるが、この取組みによって、私たち日本人も世界との関わりや歴史、文化、習俗などを学ぶ必要があることに気づかされた。次年度の取組みとして、同世代の日本人児童・生徒の参加も募り、共に学ぶことを考えている。

おわりに

少子高齢化に直面している日本、飯田市であるが、定住する外国人の高齢化も進んでいる。また、技能実習者の増加や多国籍化により、既存事業にとどまらない新たなニーズが生じてきている。求められるニーズは様々な分野を横断し一つの部署で解決できるものではなく、庁内連携はもとより、市民団体、ボランティア、企業、地域、学校等、地域ぐる

写真2 収録した応援メッセージの一場面



出典：飯田市公民館

みで取り組んでいかなければならないであろう。

外国人児童・生徒等へのキャリア教育支援は、普段は公民館との関わりが少ない世代へのアプローチであること、また、潜在していた個別の課題を地域課題と捉え、関係者の協力を得ながら実施したことの2点に大きな意義があった。

外国人、日本人問わず、市内居住者は同じ市民であり、子供たちは地域の将来の担い手である。義務教育課程の早い段階から高校進学後の進路について考える機会や、キャリア形成ができるようなきめ細かな体制などを、教育現場のみに頼ることなく、地域も一緒になって考え、青少年が夢に向かって学び、自己の目標を実現し、そして地域社会の一翼を担っていく、そのような真の多文化共生社会の実現をめざして今後も取り組んでいきたい。